

## 日本天文学会 早川幸男基金による渡航報告書 European Geoscience Union General Assembly 2006

渡航先—オーストリア

期 間—2006年4月2-9日

オーストリアのウィーンで開催された、European Geoscience Union General Assembly 2006 (EGU2006) に参加し、招待発表を行いました。Geoscience, すなわち、「地球科学」と銘打っていますが、惑星科学、太陽、惑星間プラズマなど、天文学会でも馴染みの多いセッションも数多くあり、多くの天文関係者が参加していました。このEGUですが、昨年度の参加者は8,000人超(!)、今年度も昨年度並以上の参加者があった模様です。1セッションが大体半日単位で、常時20以上が並行して走っているため、セッション数も数百というすさまじいものです。

私はそのうちの1セッション“Filamentation processes, boundaries and nonlinear structures in heliospheric plasmas”で、“Making the corona and the solar wind via nonlinear Alfvén waves from the photosphere”というタイトルで発表を行いました。今回はセッションの最初の発表者であったため、包括的なイントロをする責務も負い、かなり緊張したのですが、初心に戻って発表内容の丸暗記を試みたのが功を奏し、何とか30分の発表を無事終えました。ちなみに発表内容の中心は、最近売り出し中の結果である「磁場構造の開いた領域でのコロナ加熱と太陽風加速を、シミュレーションの手法を用いて解決した(かもしれない)」というものです(詳細は天文月2006年4月号の鈴木 建および犬塚修一郎の記事参照)。発表後には、他の研究者から隣のカフェで研究内容に関する尋問を受けたりということもあり、われわれの研究の良い宣伝になりました。

太陽風といえばオーロラのおおもとの原因です(上記天文月報の記事参照)。オーロラといえば、ヨーロッパではノルウェーです。これが直接の原因かは定かではありませんが、ノルウェーには太陽風研究者が数多くいます。私の発表後彼らといういろいろ議論し、お互いの研究手法の比較などのた

め、近々短期で私を招いてくれる計画が持ち上がりました。首都のオスロだけでなく、北極圏にある研究機関も訪問するとのことで、是非日の昇らない冬の季節をねらって訪れ、オーロラを堪能してきたいものです。

この会議は、違った分野のセッションに出て耳学問にいそむという楽しみもあります。地球上の雲の形成が、太陽系外からやってくる宇宙線と、それをブロックする太陽風によりコントロールされているという話題が熱く議論されていました。もしこれが本当なら、地球の気候が宇宙現象により決まっているという、天文学者にとっては聞き捨てならない話です。また、地球温暖化の原因として、人類活動と同じぐらい(もしくは、それ以上)太陽活動が重要などという話も真面目に議論され出しているみたいで、太陽研究者にとっては、これまた聞き捨てならない話です。

ウィーンではいわゆる普通のホテルが取れなかったため、8-10人相部屋のホステルに泊まりました。ここには、欧米のほか、イスラム圏、アジア、ラテンアメリカと文字どおり世界中からの旅行者が滞在しています。具体例を述べるスペースはありませんが、習慣の違いからくるさまざまな出来事が起こり、日本人のアイデンティティーを強く意識する絶好の機会でありました。また、日本のユースホステルとの最大の違いとして、男女混合の相部屋というのが挙げられます。トイレ、シャワー室も男女の区別がないのですが、皆当たり前のように過ごしていました。この辺も文化の違いなのでしょう。

最後になりましたが、このような貴重な機会をいただいた、日本天文学会早川幸男基金に心から感謝しております。自分の発表だけでなく、他の研究者との交流という意味においても、この機会を有効に利用させていただくことができました。ありがとうございました。

鈴木 建(東京大学大学院総合文化研究科)